様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：５３４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０２３２

研究課題名（和文）近代日本政治史における平沼騏一郎

研究課題名（英文）Hiranuma Kiichiro in modern Japanese political history

研究代表者
手嶋　泰伸（Teshima, Yasunobu）

福井工業高等専門学校・一般科目（人文系）・講師

研究者番号：２０７０７５１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、平沼騏一郎の言動を諸史料の悉皆的調査によって収集、検討することによって、政治家としての平沼の特徴について、以下の3点を明らかにした。
即ち、①平沼は政治家としてのキャリアのほぼ全期間において、分立的統治構造を克服しようとする際には機構改編よりも人的力量でもってそれを行うことを重視していたこと。②平沼は周囲の政治家とある程度共有し得る課題意識を保持していたからこそ大物政治家であり続けられたこと。③それでも平沼が右翼的な陰謀家とみられたのは、彼が複数の局面を想定し、それへの対応を漏れなく話そうとしていたためであること。

研究成果の概要（英文）：This project clarifies following three Hiranuma Kiichiro’s political features gathering his behavior by wholly investigations of various materials and analyzing them. First, in order to overcome a divided structure of governance, Hiranuma did not strengthen the power of any organization, but rather concentrated on strengthening personal authority importance during all the career as a politician. Second, the reason why Hiranuma had been a heavyweight politician was his political awareness shared in some degree with other politicians. Third, the reason why Hiranuma has been considered as a nationalistic schemer despite he shared his awareness in Modern Japan was his characteristic that he tried to explain all measures assuming multiple situations.

研究分野：日本近現代史

キーワード：平沼騏一郎　日本政治史　重臣　右翼

１．研究開始当初の背景

平沼騏一郎（1867～1953 年）は、検事総長・司法大臣・枢密院議長・内閣総理大臣を務めた、日本近代史における重要人物である。しかし、右翼団体である国本社の中心人物であったことや、1920～30 年代前半に国粋主義的な言動が目立っていたこと、さらに、政治的ポストの獲得のために種々の工作を行っていたことなどから、平沼については、右翼や策謀家のイメージが定着している。そのため、一般的に平沼の政治的評価は極めて低く、ほとんど分析もされていなかった。

ところが、その国粋主義的な言動や度重なる政治的な策動にもかかわらず、1920 年代から敗戦に至るまで、平沼は周囲から「大物政治家」として認知され続けた。よって、平沼を単なる右翼の策謀家であると考えては、それでも「大物政治家」と認知され続けた理由を理解しにくい。

そこで、①政治家としての平沼の通史的な分析から、②周囲と共有し得る平沼の合理的な政治意図を抽出し、そうした意図があったにもかかわらず、③なぜ、右翼・策謀家というイメージも周囲に与えてしまうのか、という 3 点を考察して初めて、政治家としての平沼の評価を定めることができると考えられた。

２．研究の目的

これまで単なる右翼政治家としてしかみられてこず、体系的な分析が行われていない平沼騏一郎に注目し、平沼の政治家としての活動時期全体の分析を行い、それによって、国粋主義的な言動にもかかわらず、大物政治家とみられ続けた理由と、政治的マイナスイメージが定着した要因の両方を明らかにする。そのうえで、それら 2 つの要素を統一的に解釈し、政治家としての平沼を再評価する過程で、近代日本全体が意識した政治課題を把握するとともに、近代日本の政治の水準を解明して、近代日本政治史研究を深化させることを目的としていた。

３．研究の方法

平沼騏一郎が政治的に分析されてこなかったのは、前述のように、そもそも分析に値すると考えられてこなかったからだけでなく、史料上の制約という問題もあったためである。平沼の日記が残されていないため、その政治意図や行動をそれだけで体系的に分析できる史料は無い。

そのため、平沼の研究を行うには、他の政治家や軍人の日記、回想録、その他諸史料に断片的にしか残されていない平沼の言動を網羅的に収集し、分析するしかない。その作業は、刊行されている史料だけでなく、国立国会図書館・防衛省防衛研究所図書館といった史料保存機関に保存されている多数の未刊行史料についても行われる必要があった。

本研究の方法は、そうした散在している平沼騏一郎の分析に必要な史料を、刊行史料・未刊行史料ともに網羅的に収集・分析していくというものであった。

研究を効率よく行うために、分析は最も新しい時期から古い順にさかのぼって行われた。また、各テーマ分析の前に、予め参照すべき刊行史料から平沼の言動を全て抜き出した基盤データベースを作成しておき、そのうえで、国立国会図書館・防衛省防衛研究所図書館・山形県立図書館などといった史料保存機関で調査を行い、未刊行史料についても網羅的にチェックしながら、平沼の言動を収集し、平沼の政治的特徴や周囲の評価を検討していった。

４．研究成果

上述した調査によって、平沼騏一郎について、以下の点が明らかになった。

①政治家としての平沼の政治スタンス

1930 年代前半に展開された、平沼騏一郎を首相に推そうという平沼内閣運動を分析した拙稿「平沼騏一郎内閣運動と海軍―1930 年代における政治的統合の模索と統帥権の強化―」（『史学雑誌』第 122 編第 9 号、2013 年）において、当該時期の平沼が近代日本の政治機構に特徴的な分立的統治構造を克服しようとした際に、機構改編よりも人的な力量や権威を重視していたことがわかっていた。

本研究では、平沼騏一郎の通史的分析を行ったことで、それが平沼の政治家としての活動期間全体において貫かれている政治スタンスであることが確認された。特に、拙稿「ロンドン海軍軍縮問題と平沼騏一郎」（『福井工業高等専門学校研究紀要　人文・社会科学』第 50 号、2016 年）において、平沼は人的力量や権威を重視しつつも、権限の問題に無頓着であったわけではなく、むしろ極めて権限に敏感であり、人的力量や権威を重視したのは、そうすることによって分立的統治構造そのものは存置しようとしていたからであったことが明らかとなった。

そのようなスタンスを保持していた理由は、平沼が天皇大権を防衛しようとしていたからであり、そうした平沼像は国粋的な平沼のイメージとも親和的なものであり、平沼の言動を統一的に解釈し得たものと考えられる。

②周囲と共有し得る平沼の政治意図

前掲した拙稿「平沼騏一郎内閣運動と海軍」では、平沼が満州事変の前後において、軍部の統制を目指しており、そうした周囲と共有し得る政策課題認識を抱いていたからこそ、平沼は一定の支持を得ていたことがわかっていた。

本研究で行った平沼の通史的な分析によって、そうした周囲と共有し得る政治意図を平沼はそれ以外の時期においても持っていたことが明らかになった。

例えば、拙稿「終戦期の平沼騏一郎」(『日本歴史』第 820 号）で発表したとおり、終戦期の平沼は確かに終戦の必要性を認識しており、そこにいたるプロセスについても、見通しが岡田啓介や近衛文麿、若槻礼次郎といった他の重臣とかけ離れていたわけではなく、だからこそそうした重臣たちと連携できていたことが明らかになった。

雑誌論文として発表する準備中であるが、後掲するいくつかの学会発表で報告したところでは、1930 年代半ばにおいても、平沼は見込みの少ない軍部統制をアピールポイントとした政権獲得の動きに固執しており、当該時期に展開された天皇機関説事件は平沼の陰謀とは言いがたい。むしろ、平沼をはじめとした右翼勢力による元老・宮中グループの後退としてみられがちな天皇機関説事件であるが、その実態は平沼の元老・宮中グループに対する完敗であり、枢密院議長というポストを得るために、平沼は自らが中心となってきた国本社という右翼団体を成立しつつ、元老・宮中グループよりの政治・外交政策に接近していかなければならなくなっていた。上述したような、平沼が重臣グループと類似した政治・外交方針を保持することが出来ていたのも、そうした 1930 年代の半ばの政治過程が影響したものであった。

①で述べたように、平沼は機構改編といった問題には触れずに、政治的リソースが少ない中で得られた数少ない人脈を通して人的力量と権威に依存した問題解決を目指す傾向にあった。平沼の特徴とはその政治意図にあるのではなく、むしろその政治意図や課題意識は周囲の政治家とおおむね十分共有出来るものであり、かれの特徴はその問題解決の方法にあったことが、以上の分析を総合すると指摘出来よう。

③右翼・策謀家イメージの理由

前掲した拙稿「終戦期の平沼騏一郎」では、上記のような周囲と一定程度課題認識を共有していたにもかかわらず、何故平沼は右翼・策謀家としてみられるのかということについても明らかにした。

平沼の発言は史料によって残り方に大きな差のある場合があり、記録者によって平沼の発言はニュアンスどころかその内容自体全く異なっていることも珍しくない。そのため、平沼の政治意図に関する印象は大きく異なる。

何故そのようなことが起きるのかについて分析を行った結果、平沼が誤解を生みやすい最大の要因は、常に複数の局面を想定し、その場合ごとに想起される代替案を全て発信してしまい、それに加えて、時には場違いと言えるほどに歴史などの話題も提示することにあったと考えられる。そうした複数の局面についての想定を、時には歴史の話題等もふんだんに交えながらもれなく話そうとするあまり、平沼の発言は長くなり、文書での伝達ならまだしも、口頭では聞き手に平沼の意図が正確には受け止められず、聞き手によって自分に都合の良い部分だけが印象に残っていったのだと言えよう。そのため、聞き手にとって都合の良い部分やフレーズだけが記録されのであった。そうして残された史料のうちのいくつかによって、右翼・策謀家といった平沼のイメージが形成されていた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①<u>手嶋泰伸</u>、ロンドン海軍軍縮問題と平沼騏一郎、福井工業高等専門学校研究紀要人文・社会科学、査読有、第 50 号、2016、100-110

②<u>手嶋泰伸</u>、終戦期の平沼騏一郎、日本歴史、査読有、第 820 号、2016、48-64

〔学会発表〕（計 4 件）

①<u>手嶋泰伸</u>、天皇機関説事件と平沼騏一郎の枢密院議長就任、戦時法研究会、2016 年 11 月 12 日、上智大学（東京都）

②<u>手嶋泰伸</u>、平沼騏一郎の枢密院議長就任、東北史学会、2016 年 10 月 2 日、秋田大学（秋田県）

③<u>手嶋泰伸</u>、ロンドン海軍軍縮問題と平沼騏一郎、東北史学会、2015 年 10 月 4 日、東北大学（宮城県）

④<u>手嶋泰伸</u>、終戦期の平沼騏一郎、仙台近現代史研究会、2015 年 3 月 20 日、東北学院大学（宮城県）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
手嶋　泰伸（TESHIMA　Yasunobu）
福井工業高等専門学校・一般科目（人文系）・講師
研究者番号：20707517

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)